

# 初産婦における母子同室の効果

## — 1 か月後の対児感情 —

伊 東 和 子<sup>1\*</sup> 日 暮 真<sup>2</sup>

(1998年10月31日受付, 1999年1月4日受理)

**要旨:**本研究の目的は、母子同室体制での初産婦と母子異室体制での初産婦は対児感情に違いがあるかどうか。特に産後1か月後のわが子の泣きに対する母親の反応について知ることである。調査対象は母児同室群の初産婦197名と異室群の初産婦148名の計345名である。方法は産褥3-5日の面接調査と1か月後の質問紙方法による。結果は、1) 母子同室を経験した母親は、1か月後の回避感情が低下する。2) 異室群において、乳児の泣きが強いと感ずる母親、乳児の泣いている意味が解らない母親の方の接近得点が低くなった。3) 両群に共通する乳児の泣きに対する反応は、泣き方が強いと感ずる母親ほど、回避得点は高かった。

わが子との接触時間を入院中から多く持つことが、赤ん坊に対する肯定的な感情を芽生えさせ、適切なコミュニケーションがとれる方向に変化することが期待できる。

### 【はじめに】

筆者らは初産婦の分娩・産褥期を中心に、母性の発達変容を規定する要因に注目し、調査研究を行っている。母親としての行動や感じ方、言い換えれば母親役割適応を自然な流れの中で、獲得していくためには、どのような環境、援助が望ましいのか。先の報告<sup>1)</sup>では、産褥3-4日目の対児感情を左右する影響要因のいくつかについて検討した。その一つとして、分娩後1時間以内に新生児に乳首を含ませた群の接近感情は高くなり、母児早期接触の重要性について論じた。

分娩直後の接触にとどまらず、その後の母子同室・異室も重要な環境要因の一つである。先の報告では、産褥3-4日の時点での、同室・異室別で対児感情の違いは見られなかった。本報告では、母子同室・異室別で、1ヶ月後の対児感情にどのように影響するのか、また新生児の泣きに対する母親の受けとめ方と対児感情の関連を見ることを目的とする。

### 【対象および方法】

調査対象は、前報と同一対象であり、20-35歳までの初産婦で新生児の出生時体重2500g以上、両者とも重大な疾患が無いこと、そして、その施設で定められている通常の入院期間で母児一緒に退院出来て、かつ承諾の得られた母親である。出産施設と対象数は母子

同室の体制をとっている3施設(197名)と母子異室体制の2施設(148名)である。

同室の方法は、昼夜同室が2施設で140名、昼間のみ同室1施設57名である。また同室の開始は、生まれた直後から31名(15.7%)、24時間以内102名(51.8%)、24時間から48時間の間58名(29.4%)、48時間以後6名(3.1%)で幅があるが、本研究では同室群として扱っている。

対象となった初産婦の年齢は、25歳から29歳までが49%、次いで30歳以上が33%であり平均28歳であった。家族は核家族88%であり、職業は専業主婦78%、常勤の有職者15%、その他7%であった。両群の年齢、家族形態、職業で、有意差はない。分娩状況は、自然分娩83%、吸引分娩13%、その他4%であり、陣痛促進剤は43%使用している。新生児の性別は男児184名(53%)、女児161名(47%)である。両群の有意差は、異室群で促進剤の使用が多く( $P<0.01$ )、男児が多かった( $P<0.05$ )。

1か月後の追跡者は、293名(同室群166名、異室群127名)であった。

調査期間:1993年4月より1994年3月

方法は、構成された質問紙と花沢の開発した対児感情評定尺度を用いて産褥3-5日は面接を行い、1ヶ月後の調査は郵送によった(回収率85%)。質問紙は、

<sup>1</sup>群馬大学医学部保健学科

<sup>2</sup>東京家政大学

\*別刷り請求:371-8514 群馬大学医学部保健学科

表1 対児感情評定尺度

	非常に そのと おり	そのと おり	少し そのと おり	そんな ことはない		非常に そのと おり	そのと おり	少し そのと おり	そんな ことはない
あたたかい.....	_____	_____	_____	_____	あかるい.....	_____	_____	_____	_____
よわよわしい.....	_____	_____	_____	_____	なれなろしい.....	_____	_____	_____	_____
うれしい.....	_____	_____	_____	_____	あまい.....	_____	_____	_____	_____
はずかしい.....	_____	_____	_____	_____	めんどくさい.....	_____	_____	_____	_____
すがすがしい.....	_____	_____	_____	_____	たのしい.....	_____	_____	_____	_____
くるしい.....	_____	_____	_____	_____	こわい(恐ろしい)...	_____	_____	_____	_____
いじらしい.....	_____	_____	_____	_____	みずみずしい.....	_____	_____	_____	_____
やかましい.....	_____	_____	_____	_____	わずらわしい.....	_____	_____	_____	_____
しろい.....	_____	_____	_____	_____	やさしい.....	_____	_____	_____	_____
あつかましい.....	_____	_____	_____	_____	うっとうしい.....	_____	_____	_____	_____
ほほえましい.....	_____	_____	_____	_____	うつくしい.....	_____	_____	_____	_____
むずかしい.....	_____	_____	_____	_____	じれったい.....	_____	_____	_____	_____
ういういしい.....	_____	_____	_____	_____	すばらしい.....	_____	_____	_____	_____
てれくさい.....	_____	_____	_____	_____	うらめしい.....	_____	_____	_____	_____

※調査地域の方言を考慮して筆者が追加

対象の背景、出産体験、入院中の新生児との接触について、新生児の泣きに対する認知・反応、栄養方法、援助に対する認知、などである。

対児感情評定尺度<sup>2)</sup>は、赤ちゃんに対するイメージを求める接近感情項目14、回避感情項目14が交互に並べられ合計28項目になっている(表1)。得点は、4段階の間隔尺度を使い0点から3点で接近得点、回避得点を別々に合計する。愛着得点は、接近得点から回避得点を引いて出している。1ヶ月後の調査に項目「うれしかったこと」「つらかったこと」の自由記述の分析は、それぞれ記入された内容によって、18-13のカテゴリーに分けられたが、これを更に集約して「嬉しかったこと」10、「つらかったこと」10のカテゴリーに分類し整理した。

有意差の検定は、出現頻度についてはカイ2乗値、2群間の平均値の差の検定、複数のグループ間では一元配置分散分析により比較した。

【結 果】

1. 同室・異室についての認識

出産施設の選択理由について、母子同室の施設で出産した197名中、母子同室をその理由の第1に挙げた母親は、11名(5.6%)のみであった。入院中の同室・異室は5施設とも個人の希望を聞いて決めているのではなく、その施設の管理体制に褥婦が合わせている。母親の入院中の受けとめ方は、それぞれの体制のまま

でよいと肯定している母親は、同室89%、異室80%であった。異室母親の20%は新生児との接触をもっと多く欲しいと希望していた。

2. 産褥早期と1ヶ月後の対児感情

対児感情は、産褥早期(入院中)と1ヶ月後のどちらも同室群、異室群間で有意差は見られなかった(表2)。しかし、産褥早期と1ヶ月後の変化では(表3)、異室群に有意差はないが、同室群では回避得点が1ヶ月後で低下している(P<0.05)。1か月後の母乳栄養、

表2 対児感情 -同室群と異室群の比較-

		接近得点	回避得点	愛着得点	
		N	M±SD	M±SD	M±SD
産褥 早期	同室群	197	27.6±5.8	7.4±4.9	20.2±7.7
	異室群	148	28.2±6.5	7.8±4.8	20.4±7.8
	全平均	345	27.9±6.1	7.6±4.9	20.3±7.8
1か 月	同室群	166	27.5±6.7	6.8±4.7	20.8±8.1
	異室群	127	28.5±6.7	7.4±5.1	21.3±8.6
	全平均	293	27.9±6.7	7.0±4.9	21.0±8.3

産褥早期、1か月ともに同室、異室間で有意差なし

表3 1か月後の変化 一同室群・異室群一

	接近得点	回避得点	愛着得点
	M±SD	M±SD	M±SD
同 産褥早期 室 群 1か月 (N=166)	27.4±5.5	7.6±5.1*	19.8±7.8
異 産褥早期 室 群 1か月 (N=127)	28.2±6.5	7.6±4.5	20.6±7.7
	28.5±6.7	7.4±5.1	21.3±8.7

\* 同室群の回避得点 P&lt;0.05

混合栄養別のグループ間で、対児感情に有意差はなかった。

### 3. 「わが子の泣き」に対する認知と対児感情

「わが子の泣き」について、「非常に強く泣く」から「ほとんど泣かない」までの5段階に分けての質問の結果は次のようであった。

1か月後のわが子の泣き方が激しいと思っている母親は、異室群において接近得点は低く、回避得点は高くなった。しかし、同室群において、回避得点で異室群と同様の有意差が見られたが、接近得点では有意でなかった(表4, 5)。

次に、泣きの意味理解と対児感情を見た結果、「わからなさ」の程度により、異室群で接近得点に差があ

表4 泣きの程度と接近得点

	同室		異室	
	N	M±SD	N	M±SD
あなの赤ちゃんは、泣き 叫ぶことが どのくらいありましたか				
非常に	8	30.4±7.9	3	18.7±6.2**
かなり	44	26.2±7.1	22	25.8±5.2
普通	91	27.2±6.1	82	28.8±6.6
ほんの少し	22	30.4±6.5	21	31.2±6.5
平均	165	27.5±6.7	128	28.5±6.7
		NS		P<0.01

表5 泣きの程度と回避得点

	同室		異室	
	N	M±SD	N	M±SD
あなの赤ちゃんは、泣き 叫ぶことが どのくらいありましたか				
非常に	8	10.0±6.9**	3	13.0±4.1**
かなり	44	8.2±4.6	22	10.0±5.2
普通	91	6.4±4.4	82	6.4±3.9
ほんの少し	22	4.3±3.7	21	7.7±7.1
平均	165	6.8±4.7	128	7.4±5.1
		p<0.01		p<0.01

り、同室群で有意差は見られなかった。回避得点は、両群とも泣きの意味が解らない者の方が高かった(表6, 7)。

### 4. 1か月後の母親の感想

退院から1か月の間「嬉しかったこと」と「つらかったこと」について自由記述してもらった。その内容をそれぞれ10のカテゴリーに分類して、個人の記述内容を該当のカテゴリーに入れた。したがって、複数にまたがる例もあるため、総数は対象数を超えている。(表8, 9)。

「嬉しかったこと」に挙げられたものに多かったのは、「赤ちゃんの笑顔・表情の豊かさ」、「赤ちゃんに働きかけた時に反応してくれる」など、わが子との関係がうまくとれたときの様子について44%が挙げられ

表6 泣きの意味理解と接近得点

泣きの意味	同室		異室	
	N	M±SD	N	M±SD
だいたい解る	71	27.3±6.8	52	29.5±7.3 *
少し解る	80	28.0±6.8	67	28.4±5.6
解らないことが多い	15	25.5±5.6	9	23.0±4.7
		NS		P<0.02

表7 泣きの意味理解と回避得点

泣きの意味	同室		異室	
	N	M±SD	N	M±SD
だいたい解る	71	5.0±4.1**	52	6.5±5.5 **
少し解る	80	7.6±4.5	67	7.2±5.9
解らないことが多い	15	10.7±5.0	9	13.4±6.1
				同室, 異室 とも P < 0.01

表8 嬉しかったこと

内容	同室	異室	合計
赤ちゃんの笑顔・表情の豊かさ	7 5 (39.3)	4 3 (27.4)	1 1 8 (33.9)
成長がわかる	1 9 ( 9.9)	3 2 (20.4)	5 1 (14.7)
赤ちゃんが働きかけに反応	1 9 ( 9.9)	1 7 (10.8)	3 6 (10.3)
家族・周囲が協力的	2 0 (10.5)	1 3 ( 8.3)	3 3 ( 9.5)
母乳をよく飲む・分泌増加	1 3 ( 6.8)	1 1 ( 7.0)	2 4 ( 6.9)
子どもがいるという充実感	1 4 ( 7.3)	8 ( 5.1)	2 2 ( 6.3)
ようやく眠ってくれた時	1 2 ( 6.3)	9 ( 5.7)	2 1 ( 6.0)
必要とされている自分を感じて	1 1 ( 5.8)	8 ( 5.1)	1 9 ( 5.5)
赤ちゃんの健康状態が良いこと	5 ( 2.6)	6 ( 3.8)	1 1 ( 3.2)
その他	3 ( 1.6)	1 0 ( 6.4)	1 3 ( 3.7)
計	1 9 1 (100.0)	1 5 7 (100.0)	3 4 8 (100.0)
			( )内%

表9 つらかったこと

内容	同室	異室	合計
睡眠不足	6 0 (29.4)	5 6 (35.2)	1 1 6 (32.0)
泣く理由が不明・泣きやまない	4 0 (19.6)	2 9 (18.2)	6 9 (19.0)
授乳の問題	3 5 (17.2)	1 4 ( 8.8)	4 9 (13.5)
寝てくれない	2 1 (10.3)	1 4 ( 8.8)	3 5 ( 9.6)
母の健康問題	1 0 ( 4.9)	1 2 ( 7.5)	2 2 ( 6.1)
子どもの健康問題	1 2 ( 5.9)	8 ( 5.0)	2 0 ( 5.5)
家族とうまくいかない・非協力的	9 ( 4.4)	7 ( 4.4)	1 6 ( 4.4)
家事が滞りがち・自分の時間がない	6 ( 2.9)	4 ( 2.5)	1 0 ( 2.8)
その他	3 ( 1.5)	6 ( 3.8)	9 ( 2.5)
なかった	8 ( 3.9)	9 ( 5.7)	1 7 ( 4.7)
計	2 0 4 (100.0)	1 5 9 (100.0)	3 6 3 (100.0)

( )内%

ていた。同室・異室でやや異なっていた点では「成長がわかる」という内容は異室群の母親に多く見られた。「家族・周囲が協力的」で嬉しかったという者も9.5%あげられた。

「つらかったこと」の最も多かったのは、「睡眠不足」である(32%)。次に多かったのが、「赤ちゃんの泣く理由が解らない・泣き止まない」という泣きに関することであった。また、「母乳がうまく飲ませられない」「授乳間隔が短い」「飲んだ後気分悪そう」など「授乳の問題」が3番目に挙げられた。

### 【考 察】

産褥期の母子同室・異室に関するこれまでの研究は、古くは感染の問題、管理上の観点が多かった。近年においては、特に母乳哺育確率の観点での研究と奨励が多くなり、WHO/UNICEFの勧告の一つに「母と子が一日中一緒にいられるように実施すること」とうたわれており、母乳哺育成功のための一項目となっている。その他母親の意向を確かめるもの、また初産婦における育児不安を軽減する方向での研究もあるが、母親の愛着感情形成の観点、わが子の認知とどう関係するかといった母子関係に直接関わってくる問題の取り上げ方は少ない。

本研究では、対児感情評定尺度を用いて乳児のイメージから母親の愛着感情をとらえた。両群で入院中の差は見られなかったが、花沢<sup>3)</sup>の研究では入院期間中の接近得点は異室群より同室群の方が高い結果となっている。花沢の研究における対象のとりかたは本研究とは大きく異なり、両者の結果を単純に比較して論じることは出来ない。金沢<sup>4)</sup>の結果は入院中の同室群で回避得点が低くなり、児を受け入れる気構えがより整

いつつあると云っている。本研究では1か月後の変化として、同室群の回避得点が低下したことは異室群に見られなかった現象である。特に初産婦において退院後の1か月間は、不安が高まる時期にもかかわらず、同室群の回避感情が低下することは注目すべきである。さらに、対象数を増やして検討を重ねたい。

新生児の泣きに対する母親の反応を対児感情で見た結果、赤ん坊が強く泣き叫ぶと感じている母親ほど、回避感情が強くなる(両群とも)。しかし、泣きの意味が解れば回避感情は下がる。同室、異室の違いで明らかになったのは、「泣き方が強い」と感じている母親も、「泣く理由が解らなくて困る」と思う母親も、同室群では接近感情が低下していない点である。異室群の場合は回避感情が高くなるばかりでなく、接近感情も低下する。乳児の泣きは、1か月後の自由記述「つらかったこと」の2番目に多く挙げられた事柄でもある。母親行動の観察を行った福地ら<sup>5)</sup>の研究でも同室群の方が、子の泣きに対する母親の反応はより肯定的であると言っている。乳児の泣き声は、乳児自身にとっては他者との関係を触発する最も強力なシグナル行動である。しかし母親にとっては今後の適切な母子関係の構築と、母子関係崩壊の危険性という相反する二面性を持っている。今後とも研究を継続し発展させねばならない分野とも考える。

入院中の経験は、初産婦の場合特に学習されたこととして記憶に残ると考えられる。高橋<sup>6)</sup>の調査で、経産婦が同室の経験ない場合今回も同室を望まない率は半数以上になり、同室経験者は今回も同室希望者が80%を超すという結果になっている。また、褥婦の多くはその施設で行われている方法に順応するので、同室・異室どちらであってもそれをよしとする傾向にある調査資料<sup>7)</sup>もある。本調査においても、同室者・異室者ともに現状でよいと答えている率が89%、80%になっていることは、上記の傾向をそのまま物語っていると考えられし、第2子出産にも影響するだろう。Montgomery<sup>8)</sup>は「母子同室制は選択的であるべきだと考えている人が多いが、強制的であってもよい。その理由は、妊婦は受動的、依存的であって自分で決めることが難しい。自分が選んだ病院の方式が母子同室であるならば、容易にそれを受け容れる」と述べている。Kathleen F.<sup>9)</sup>は、親になることでリスクの高い人にとって、同室制は重要な介入である、と言っている。

出産に関わる専門家の役割は重要である。出産の場(環境)が母子の関係を促進したり、難しくしたりする一要因になるのである。今後対象の選択を厳密にし、より精度の高いデータをもとに追試を繰り返す必要が

あること、また効果の期間についても検討を重ねていきたい。

#### 謝 辞

ご協力いただいた初産婦の方、施設の職員の方々に感謝いたします。

#### 〈文 献〉

1. 伊東和子, 清野喜久美, 関島英子, 日暮真: 母性衛生 37:455-463, 1996
2. 花沢成一: 母性心理学. 医学書院. 67-68 1992
3. 花沢成一: 日本大学人文科学研究紀要. 34. 157. 1988
4. 金沢浩二, 稲福薫: 平成6年度厚生省心身障害者研究報告書 55-57, 1994
5. 福地彰子ほか: 日本看護科学学会誌 (発表抄録) 108-109, 1990
6. 高橋悦二郎: 周産期医学 13:2168-2175, 1983
7. 村田文也: 日新児誌 6:207-216, 1970
8. Montgomery. J.C: Postgraduate Med. 12:233-236, 1952
9. Kathleen F. Norr, Joyse E. Roberts and Uwe Freese: Journal of Nurse-Midwifery 34:85-91, 1989

## Effects of Infant Rooming-in For Primiparae.

— Maternal Feelings in the Month After Delivery —

Kazuko ITO<sup>1\*</sup>, Makoto HIGURASI<sup>2</sup>

**Abstract :** The purpose of this study was to figure out whether there's a difference between the maternal feelings of primiparae in a rooming-in group and those of primiparae in a nursery group. In particular, we put focus on their reactions to their infants' crying in the month after the delivery.

Subjects were 345 primiparae; 197 of them spent the hospitalization period in the same room as their infants, while 148 did not.

The investigation was conducted by interviewing the primiparae for 3 to 5 days during the hospitalization period and having them answer a questionnaire in the month after the delivery.

The results of the investigation showed that :

- 1) The primiparae who had kept their infants in their rooms showed decreased feelings of avoidance for their infants at the end of the month ;
- 2) Among the group whose infants had stayed at the nursery, the louder they felt the crying was, the lower their degree of closeness, and those primiparae who had difficulty identifying the reason for their infants' crying showed a lower degree of closeness to their infants than those who had no difficulty;
- 3) The reactions of primiparae to their infants' crying were similar in both groups : the louder they felt the crying was, the higher their degree of avoidance were.

In short, having more contact with their infants from the early stages will bring about a positive feeling in primiparae for their infants, which will in turn enhance the communication between them.

**KEY WORDS :** Maternal Feeling, Mother-Infant Rooming-In

---

<sup>1</sup> School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Gunma University      <sup>2</sup> Tokyo Kasei University

\* Reprint address : Gunma University School of Health Sciences, Maebashi, 371-8514, Japan